

# 『今月の天候と農作業』

通巻第5550号  
12月号  
平成24年11月30日発行  
宮崎県  
宮崎地方气象台



## 【九州南部1か月予報】

向こう1か月の気温、降水量及び日照時間の各階級の予想される確率は次の通りです。

## 【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	60	30	10
降水量	九州南部	30	40	30
日照時間	九州南部	40	30	30

## 【概要】

平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

**期間の前半は気温が低く、かなり低くなる可能性があります。**

向こう1か月の平均気温は、低い確率60%です。

〈1週目の予報〉 12月 1日(土)～ 12月 7日(金)

天気は、東シナ海側では気圧の谷や寒気の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。太平洋側では気圧の谷の影響で曇りや雨の日がありますが、晴れる日が多いでしょう。(詳しくは週間天気予報をご利用ください。)

気温は、低い確率80%です。

〈2週目の予報〉 12月 8日(土)～ 12月 14日(金)

天気は、冬型の気圧配置となりやすく、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、低い確率50%です。

〈3週目から4週目の予報〉 12月 15日(土)～ 12月 28日(金)

天気は、冬型の気圧配置となりやすく、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

気温は、九州南部で平年並または低い確率ともに40%です。

## 普通作物

### ◆ 水稻

---

#### 1 土づくり

土づくりは、気象災害に強く安定した収量確保や品質の良い米づくりの第一歩です。

しかし、農業試験場が県内各地の水田土壌を長期にわたり調査している結果では、近年の土壌は地力窒素やケイ酸分など、稲の生育に重要な成分の著しい低下や、通気性などの物理性の悪化が顕著に表れています。

この改善に向け、堆肥等の有機物の投入や深耕などの土づくりを十分行いましょう。

堆肥は前作物や土壌条件でも異なりますが、牛ふん堆肥の場合は1ト<sup>n</sup>程度投入します。ケイ酸質資材の投入は稲の茎葉を硬くし受光体勢を良くしたり、倒伏やいもち病にも強くなる効果がありますので、地区基準をもとに施用します。

ロータリー耕だけでは作土が浅くなりがちですので、深耕を行い根域を15<sup>cm</sup>以上確保しましょう。プラウ耕は作土層を深くする他に、防除の難しいクログワイ、オモダカなど多年生雑草の塊茎（イモ）を土壌表面に露出させ、厳寒期の低温や乾燥にさらしたり、深い層に埋没させることで発生密度を低下させる効果もあります。

#### 2 種子の準備

自家採種した種子は異品種の混入や、イネシンガレセンチュウ、馬鹿苗病など種子伝染性の病虫害発生の恐れも高いので、採種ほ産の更新種子を用いましょう。

#### 3 害虫防除

スクミリングガイ対策として、冬場にロータリー耕を行うことで、地中の貝を破碎したり、低温での密度低下が図れますので、発生ほ場ではロータリー耕の回転数を上げて低速で耕うんします。

### ◆ 麦類

---

#### 1 播種・排水対策

平坦地でも播種の適期は12月上旬頃までですが、適期から10日遅れるごとに播種量を一割程度増量して、苗立ちや茎数を確保します。発芽やその後の生育で湿害を受けないように、作溝して排水対策に努めましょう。

(鎌田 博人)

## 施設野菜

### ◆ 共通事項

---

暖房用燃料のA重油は90円/L程度と依然として高単価で推移しており、経営負担はさらに大きくなることが予想されます。「小さな効果の積み重ね」が大きな節油効果となりますので、身近なところから万全の対策を期しましょう。すでに暖房機の点検やハウスサイドの高保温性資材の設置など対策は取られていると思いますが、暖房機や自動開閉装置の設定温度と目標としている管理温度に差がないか今一度確認しましょう。また、内張ビニルのつなぎ目に隙間があると、暖房効率が大きく低下しますので、隙間のないことが省エネにつながりますので、しっかり点検しましょう。

かん水は、晴天時の午前中に行い、地温低下を防ぎます。

### ◆ きゅうり

---

促成きゅうりの摘心栽培では、子づる～孫づる、つる下ろし栽培では主枝となる子づるの収穫期となります。

ハウス内の温度管理は全作型ともに、午前中26～28℃、午後23～25℃、夜間12～14℃とします。

摘心栽培では採光・通風を良くするために、孫づるまでは定期的に摘心し、ひ孫以降は成長点を2～3本確保しながら、込み合った場所の枝を中心に整理します。追肥は、月に窒素成分で、10㎡当たり5～6kgをかん水時に施用します。

つる下ろし栽培でも着果が安定してきたら、午前中はできるだけ空中湿度を確保するため、内張りビニルの開閉による湿度調節を行います。追肥は、摘心栽培と同様に行います。

### ◆ ピーマン

---

促成ピーマンは収穫とあわせフトコロ及び側枝の整理を行いましょう。低位節から発生している徒長枝は根元から除去します。第3～4分枝のフトコロ枝は、収穫が終わったら適宜切り戻します。第5分枝以降の側枝については2～3節で摘心を行います。

追肥は、2月までは月に窒素成分で10㎡当たり3～4kgずつ行います。ハウス内の温度は、午前中26～28℃、午後は24～26℃とし、夜間は18℃とします。

### ◆ トマト

---

促成の丸トマト、ミニトマトともに収穫時期となります。追肥は、開花段ごとに10㎡当たり窒素成分で1kgを目安に行います。ハウス内の温度は、午前中26

～28℃、午後23～25℃、夜間10～12℃とします。ミニトマトはこれより1～2℃高めに管理します。

#### ◆ いちご

---

頂花房の収穫と第1腋花房（2番果）の肥大期となります。着果負担も大きく、草勢が低下すると第2次腋花房（3番果）以降の収量、品質に影響するため、遅れないよう追肥を行います。追肥は、液肥を主体に、月に窒素成分で10㎡当たり2～3kgを目安としますが、低温期は吸水量、吸肥量ともに低下しますので、かん水、追肥ともに生育を見ながら控え気味に行います。ハウス内の温度は、午前25～28℃、午後20～25℃、夜間5～8℃を目標に管理します。

（郡司 孝幸）

### 葉茎根菜類・いも類

#### ◆ アスパラガス

---

地上部を刈り取る時期です。刈り取りは茎葉が完全に黄化した後が望ましく、おおむね下旬が適期になります。しかし、下旬から1月上旬にかけ、株は休眠から覚めて萌芽できる状態になります。そのため、早出しをねらう場合は、中旬までに刈り取りを終えましょう。

#### ◆ ごぼう

---

トンネル栽培は上旬には播種を終えましょう。発芽適温は20～25℃で、30℃以上では発芽率が低下します。そのため、高温になるときには換気が必要です。特にトンネルビニールが新品の場合は、高温になりやすいので注意しましょう。

#### ◆ にら

---

促成栽培の収穫期です。無加温栽培では、過湿による白斑葉枯病の発生や凍害による葉先のヤケが心配されます。白斑葉枯病の予防的な防除を行い、発生源となる残渣をハウス外に持ち出とともに、除湿保温に気を配りましょう。加温栽培では、最低夜温を5℃に設定しますが、刈り取り後3～4日だけは、10℃に設定にすると、萌芽が早く、丈夫な株になります。

#### ◆ レタス

---

ポリなどのトンネルの必要な時期を迎えます。レタスは冷涼な気候を好みますが、収穫前の低温は腐敗病の発生を助長するため、トンネル被覆を行い発生を防ぎます。トンネル管理の温度が高いと緩んだ縦長の形状になりやすく、

寒すぎると締まった小玉になります。

レタスの生育適温は15℃から20℃なのでトンネルの開閉はこの温度に合わせてます。開閉ができない場合は、不織布等のべた掛け資材をレタスにかぶせた上で、トンネルの裾を常時すかしておくことである程度の栽培は可能です。しかし、特に冷える夜はトンネルを閉めて低温被害が出ないようにすることが重要です。

(河野 健次郎)

## 果樹

### 1 常緑果樹

---

#### ◆ 露地柑橘の害虫防除

ハダニやカイガラムシ類の越冬虫数を減らすため、マシン油乳剤を散布しましょう。この剤は、虫が呼吸する気門を塞ぐことで殺虫するので、効果の低下が見られません。枝や葉に十分な量を散布してください。なお、樹勢が弱った樹には冬の散布は避け、3月上旬頃に散布します。

#### ◆ 完熟きんかん

1月中旬からは、完熟きんかんの収穫が始まります。果実肥大が十分に確保されている園では、昼間の温度は15℃程度を目安に管理し、着色促進に向けて管理しましょう。肥大不足で、秋季高温管理を行っていた園では、昼温28℃から、肥大を期待する場合は、20℃へ、着色を進める場合は15℃へ徐々に落としていきましょう。着色が進んできた園では高温と高湿度により、水ぐされ症や裂皮が発生しますので、早朝の換気により、施設内湿度を低く維持しましょう。

#### ◆ マンゴー

最初に出てくる花芽は、分化が不十分なため、花と共に葉も着生します。芽が小さいうちに葉を切り落としましょう。

1～2割の花穂で開花が始まったら、受粉用のハチを導入します。曇りや雨の日が多いと、温度が足りずにハチの飛びが悪くなるだけでなく、葯（花粉の入った袋）が開かずに花粉が出てこないの、結果不良やミニマンゴー発生の原因となります。昼間は25℃以上に温度を上げて、ハチの活動と開葯を促進しましょう。

## 2 落葉果樹

---

### ◆ 元肥の施用

落葉果樹は、かんきつ類などの常緑果樹と違い根の活動が始まるのは2月上旬頃と早い傾向にあります。このため、なし、くり、かきなどは年内に元肥を施用しましょう。

### ◆ くりの剪定

剪定は落葉後に行います。主枝を2～3本にして、1つの主枝に垂主枝を2～4本程度確保します。樹高が3.5m以下になるよう主幹部の切り下げを早い時期に行います。

大玉多収生産のためには、太さ8cm以上、長さ50cm以上の結果母枝を1㎡当たり5本程度になるように整理します。

## 3 果樹園共通

---

### ◆ 石灰の施用

土の酸性化は肥料の吸収や根の生育を阻害して、樹勢低下を招きます。土壌分析を行い、酸性の場合は石灰質資材で調整しましょう。

(山口和典)

## 花き

### ◆ 花き全般

---

11月は連続した曇雨天や高夜温も少なく、順調に気温が低下し、全般的に良好な生育の月でした。12月はやや不安定ながらも年明けに向かって徐々に安定した天気になることが予想されています。気象予報をチェックし、天候に応じた細やかな栽培管理を心がけましょう。

### ◆ 電照ギク

---

品種、作型、生育ステージにあった温度管理をしっかりと行って、品質の高いキク生産に努めて下さい。県総合農試選抜「神馬66-4」の基本的な栽培管理は「神馬2号」と同じになります。「神馬」系統は電照期間中に10℃以下の低温に遭遇すると開花遅延を起こしやすい品種です。消灯までは夜間の温度を13℃（実温）で管理する必要があります。低温に遭遇した場合は、消灯2週間前からの夜温15℃で予備加温を行って下さい。消灯後は18時から1時までは15℃、1時以降は12℃の変温管理を行うと大幅には開花が遅れず、暖房コストの削減が可能です。

## ◆ スイートピー

---

本年は10、11月に目立った生育障害も発生せず、順調に生育、開花しています。ほ場条件や品種を考慮し、つる下げや腋芽の除去、葉面散布の活用によって草勢管理を行い、安定した出荷につなげましょう。また、気温が下がり、花シミや灰色かび病発生リスクが高まりますので、微生物農薬の活用や暖房制御装置の効果的な活用で対策をとりましょう。

## ◆ デルフィニウム・エラータム系

---

収穫前から2番花の抽だいが始まっている株もありますので、出荷計画にあわせた温度・肥培管理を行って下さい。1番花出荷終了後の夜温管理は、ロゼットを回避して1～2月に出荷を行う作型では抽だいまで15℃、ロゼットを打破して3～4月に出荷を行う作型では一定期間低温でロゼットを打破した後、10～15℃で加温を行って下さい。さらに電照を行う必要もありますので、地域の農業改良普及センターに相談しましょう。

## ◆ ホオズキ

---

早い地域では1月から植え付けが始まります。ほ場の消毒や、親株の地下茎の堀上・調整など準備を始めて下さい。特に白絹病等の立ち枯れ性病やネコブセンチュウが発生したほ場は十分な土壌消毒を実施し、植え付ける地下茎の選別・消毒は十分に行って下さい。

## ◆ ラナンキュラス

---

内ビニールの開閉をしっかり行い、昼間は換気を徹底して品質の向上に努めましょう。ハウス内の気温を下げすぎると生育が停滞し、収量があがらないので15～20℃を目標に温度管理を行いましょ。1番花の収穫が始まると草勢が低下するケースが見られますので、硝酸態チツソの割合の多い液肥を適宜施用して草勢の維持を図り、安定的な採花を行いましょ。

(中村 広)

## 畜産

### ◆ 家畜

---

本格的に寒さが厳しくなり、特に朝夕の気温が急激に低下する時期です。寒さや温度変化は家畜の生産性を低下させますので、防寒対策をしっかり行いましょ。特に子牛・子豚の幼畜は寒さに弱いので、加温施設を設置し、隙間風が入らないようにしましょ。また、冬場、乾燥により床が乾くと埃や塵など

が舞い、家畜が吸い込み呼吸器疾患を発生しやすくなりますので、極細かな霧を噴霧するなど適度な湿度を保つように心がけて下さい。牛舎内の換気も重要です。牛舎内にアンモニアガスなどが充満すると、家畜の生産性が急激に落ちる原因にもなります。気温の上がる日中に畜舎カーテンを開け、換気扇やファンを回すなどこまめな換気を行いましょう。

## ◆ 飼料作物

---

牧草への堆肥の施用は10㎡あたり3トンを上限とします。また、完熟していない堆肥を施用すると春先の雑草繁茂の原因になりますので、堆肥舎で十分攪拌し、温度を70℃以上に上げ、雑草の種子を死滅させましょう。冬場の牧草は、硝酸態窒素を比較的多く含むものがあります。牧草を収穫する時、葉の色が濃すぎるものは要注意です。普及センターで事前に硝酸態をチェックし、安全を確認し、家畜に給与するようにして下さい。

## ◆ 家畜防疫

---

鳥インフルエンザ発生の危険性が高まる時期です。本県においても昨年初めに高病原性鳥インフルエンザが発生し、県内の畜産に大きな打撃を及ぼしたことは記憶に新しいところです。鶏舎や農場内の石灰消毒と、防鳥ネットの点検・補修を徹底し、野鳥や野生動物の侵入を防ぎます。ウイルスはヒトや車両からも侵入するので、農場内への出入り時には衣服の着替えや、車両の消毒を行います。沢水や井戸水を利用している農場では、定期的に水質検査を実施し、塩素剤などで消毒しましょう。

(小坂 昭三)

## 特用作物

### ◆ 茶

---

#### 1 越冬芽の凍害対策

気温の低下に伴い、越冬芽の耐凍性は徐々に高まりますが、急激な低温が予想される場合には、早生品種や中切り園での凍害（芽つぶれ）の発生に注意して下さい。

防霜ファンやスプリンクラーを利用して防寒対策を実施する場合には、実際の気温とセンサーの温度差をチェックした上で設定温度を0℃とし、越冬芽の耐凍性の獲得状況を確認しながら実施します。

#### 2 カンザワハダニの防除

一番茶の収量、品質に対する影響が大きいカンザワハダニは、冬期でも産

卵する個体が多いため、越冬前後の防除により密度を下げるのが重要です。

防除の際は、裾部や葉裏への薬剤の付着状況を確認しながら、防除暦に従って散布して下さい。

### 3 新・改植園の準備

茶の有効土層は60㎝程度といわれていますが、茶の根は1m以上伸びることもありますので、来年の春に新・改植を予定しているほ場では、少なくとも60㎝、できれば1m以上の深耕、天地返し等を実施し有効土層を確保します。また、土壌pHの改善や排水対策等も実施しておきましょう。

(佐藤 邦彦)

## ◆ しいたけ

---

### 1 原木の玉切り

原木伐採後、1～2ヶ月程度の葉枯らし乾燥が済んだら玉切り作業を行います。玉切りの適期は、①若木では木口面に半径の3分の2程度、老齢木では樹皮近くまでひび割れが入ったとき②小枝を折り曲げるとササクレ状に折れるとき③小枝の内樹皮が褐色になるとき、とされています。

### 2 植菌

玉切り後は、害菌や害虫の侵入防止のため早めに植菌を行います。困難な場合には、原木を直に地面に置かないように集積し、笠木等で覆い、直射日光と乾燥を防ぎながら、植菌までの間適切に管理します。

種菌の種類は、種駒、成型駒などがありますのでそれぞれの種菌の性質を理解し、栽培条件や栽培目的に合った品種を選定します。

植菌数は末口直径（cm）の2倍以上とされており、間隔は縦に長く、横に短くし、千鳥状に行います。原木の太さによって数を増やしたり、樹皮に傷がある場合や枝の切り口がある場合には周囲に余分に植菌して、害菌の侵入を防ぎましょう。

(小田 三保)

## ◆ 葉たばこ

---

今月も来年作に向けての準備が主な作業となります。

1 病原菌密度の低減と土壌消毒剤の効果促進を図るために、ロータリーを用いた冬期耕うんを最低3回以上は行いましょう。

2 土壌消毒を実施する際には、農薬使用基準に沿って薬害、公害の無い様最大の注意をはらいましょう。

また、ピクリン剤で全面消毒を実施する場合は植付三ヶ月前迄とし、特に本

年作にグレー葉が生出したほ地では使用時期と使用量に十分注意しましょう。

3 練り畦防止のために、土壌水分の良い時期に施肥畦立等を行いましょ。また、病害の耕種的防除と除塩対策のために、溝堀機等を用いて排水溝を完備しましょ。

4 異物・異臭・虫害防止のために作業場および貯蔵庫の清掃を徹底しましょ。

(松元 貴光)

### **内容の詳細について**

12月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病虫害の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

**★「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。**

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

## なになに農業アラカルト

みずみずしいフルーツは、ビタミンやミネラルなど健康を維持するために必要な栄養素をたくさん含んでいます。旬のフルーツやお好みのフルーツを毎日食べ、バランスの良い食生活を目指しましょう。

さて、本県では恵まれた気象条件や変化に富む土地条件を活かし、うんしゅうみかんや日向夏等のかんきつ類をはじめ、くりやぶどう、なし等の落葉果樹、さらにはマンゴー等の亜熱帯果樹に至るまで、バラエティに富んだフルーツが生産されています。

また、マスメディアの利用やイベント開催、量販店での試食販売等の取組を通じて、完熟マンゴー「太陽のタマゴ」や完熟きんかん「たまたま」など一部の商品はブランド力も向上してきたところですが、さらに本県産果樹を全国に広くPRし消費拡大を図るためには、より効率的でアピール力の高い情報発信が必要となっています。

特に近年は、SNS（ソーシャルネットワーキングサービス）やインターネットショッピングの利用者が増えており、これらを上手く活用することがますます重要となりますが、本県では、全国に比べこのような取組事例が少ない状況にあります。

そこで、県では、本県の果樹産地と消費者や食品事業者等の情報交流の場として、新たにウェブサイトを開設することとしました。

## ◆ ウェブサイト「みやざきフルーツコンシェルジュ」の概要



ホテルの宿泊客の求めに応じ、その街の案内やチケットの手配等を行うコンシェルジュのように、アクセスしていただいた方に県内フルーツの案内や果樹生産者の紹介等を行うことをイメージし、ウェブサイト名は「みやざきフルーツコンシェルジュ」としました。

ウェブサイトでは、果樹産地や旬の時期、生産者のみなさんの四季折々の栽培状況や自らが生産したフルーツ・加工品等の紹介など楽しくおいしい情報を発信し、消費者や食品・観光産業等のみなさんからはたくさんのメッセージやご要望をいただき、その交流を深め、本県産フルーツのPRと消費拡大を推進していきたいと考えています。

「みやざきフルーツコンシェルジュ (<http://www.frucon.jp>)」の公開は今月を予定していますので、是非ご覧ください。また、フェイスブックページにも取り組んでいますので、こちらにつきましても「いいね!」をよろしくお願ひします。

「みやざきフルーツコンシェルジュ」に関するお問い合わせは、県農産園芸課果樹担当 ☎0985 (26) 7137まで。

## 1 2月における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

農作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
施設果菜類	病害一般	—	暖房経費低減のため、ハウスを多層・多重被覆にしているところでは、施設内が多湿になりやすく病害の発生が助長されるので、換気や早朝加温など適切な温湿度管理に努めます。
冬春きゅうり	べと病	やや少	いずれの病害も多発してからでは防除効果が低くなるので、予防に重点をおき、発生が見られたら初期防除を徹底します。
	うどんこ病	やや少	
	褐斑病	やや少	うどんこ病は乾燥時に多発するので、ほ場内が過乾燥にならないように管理します。
	黄化えそ病 (MYSV)	—	褐斑病は平年よりやや少の発生ですが、べと病やうどんこ病の発病後に激発することがあるので注意します。
	ミネキイロアザミウマ	やや少	キュウリ黄化えそ病(MYSV)の発生が、一部の施設栽培で確認されており、今後感染の拡大が懸念されることから厳重な警戒が必要です。発病株を確認した場合は直ちに抜き取り適切に処分するとともに、本病を媒介するミナミキイロアザミウマの防除を徹底します。
	病害虫全般 (改植時の留意点)	—	ウイルス病を媒介するコナジラミ類やミナミキイロアザミウマに対しては、前作のきゅうりを抜根する前の防除を徹底するとともに、抜根後は少なくとも20日間蒸し込みます。 また、前作に褐斑病などの発生があった場合には、後作きゅうりの定植後直ちに予防防除し、感染を防ぎます。
冬春ピーマン	斑点病	並	うどんこ病は、乾燥時に多発するので施設内が過乾燥にならないように注意します。一方、うどんこ病以外の病害は、多湿条件で発生しやすいので、ハウス内の温湿度管理、排水対策等を徹底します。 いずれの病害も、予防・初期防除を徹底し、罹病した枝葉は感染源となるので発見したら直ちに除去し、ほ場外に持ち出します。
	うどんこ病	並	
	菌核病	並	
	黒枯病	前年、前々年より少ない	アザミウマ類では、特にヒラズハナアザミウマの発生が多くなっていますので、防除情報を発表しています。多発してからでは防除効果が低くなるので、低密度のうちに防除を徹底します。また、有色粘着板を設置し、発生密度を抑制します。
	アザミウマ類 ※	やや多	
冬春トマト	葉かび病	やや多	両病害ともに発生がやや多い状況です。青枯病は芽かきなどの管理作業で伝搬しやすいので、発病株を確認した場合は、隣接する株も含め速やかに抜き取り、ほ場外に持ち出し適切に処分します。
	青枯病	やや多	
	タバココナジラミ類	並	トマト黄化葉巻病の発病株は伝染源になるので、必ず株全体を抜き取り土中に埋めるか、ビニル袋に入れて枯れるまで密閉します。本病を媒介するタバココナジラミ類の早期発見・防除に努めるとともに、施設内に黄色粘着トラップ等を設置し密度を抑制します。
	トマト黄化葉巻病 (TYLCV)	前年より少ない	
冬春いちご	うどんこ病	やや多	うどんこ病の発生がやや多い状況です。予防に重点をおくとともに、罹病葉・果実は伝染源となるので速やかに除去します。 炭疽病の発生は平年並の状況ですが、発病した株は早期に除去し、新たな感染を防止します。
	炭疽病	並	
	ハダニ類	やや多	寄生数が増加してからの防除は難しくなるので、低密度時に防除を徹底します。なお、薬剤感受性が低下しやすいので同一系統薬剤の連用は避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を心掛けます。
	アブラムシ類	並	
かんきつ類 (露地栽培)	シロハダニ	やや少	冬季のマシン油乳剤の散布は、薬剤感受性の低下には影響がなく、また、カイガラムシ類との同時防除が可能であるので、樹勢等をみながら実施します。
茶	カザリハダニ	やや多	冬季のマシン油乳剤の散布が効果的です。

1) ※は防除情報を発表しています。

2) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki> です。

(病害虫防除・肥料検査センター)